

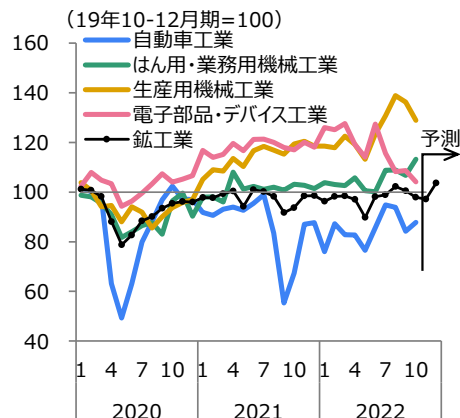
日本

鉱工業指数（2022年10月）

一部業種の生産調整でコロナ前水準を割り込む

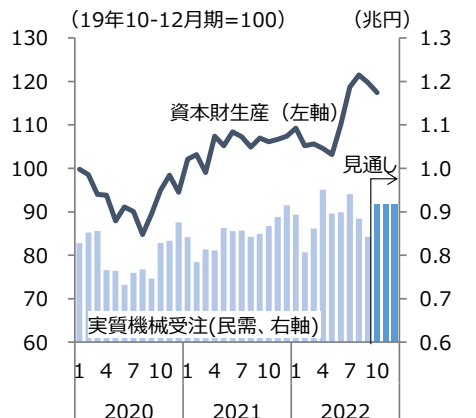
政策・経済センター
菊池紘平
03-6858-2717

1 鉱工業生産指数（業種別）



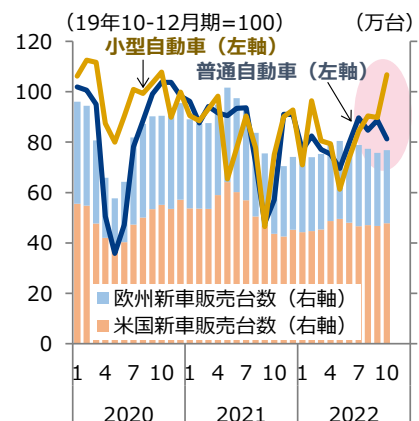
注：予測は製造工業生産予測指数を経済産業省が補正した予測値で延長。
出所：経済産業省「鉱工業指数」「製造工業生産予測指数」

2 資本財生産と実質機械受注



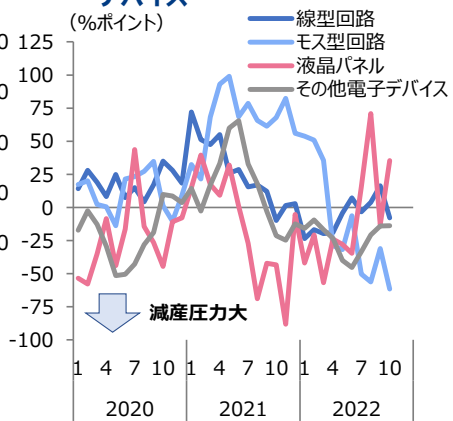
注：船舶・電気を除く。季調値を企業物価指数の最終資本財価格指数で実質化。
出所：内閣府「機械受注統計」、日本銀行「企業物価指数」より三菱総合研究所作成

3 自動車生産と欧米の新車販売



注：新車販売台数は後方3か月移動平均値。
出所：経済産業省「鉱工業指数」、米国商務省、欧州自動車工業会

4 出荷・在庫バランス（電子部品・デバイス）



注：出荷指数前年比-在庫指数前年比。モス型回路はロジックとメモリの加重平均。
出所：経済産業省「鉱工業指数」

評価ポイント

今回の結果

- 22年10月の鉱工業生産指数（季調値）は、前月比▲2.6%と、2ヵ月連続で低下。製造工業生産予測指数に基づく予測値（同▲3.6%、経産省補正済み）は上回ったが、コロナ前の19年10-12月の水準を割り込んだ（図表1）。
- 業種別では、電子部品・デバイス（同▲4.1%）に加え、夏場にかけて好調だった生産用機械（同▲5.4%）にも生産調整がみられ、全体を押し下げた。他方、自動車工業は同+5.6%と緩やかに持ち直したほか、企業設備投資が堅調に推移するなか、はん用・業務用機械工業（同+6.1%）が好調を維持。

基調判断と今後の流れ

- 生産指数は、前年比で見れば持ち直しの動きが続いているものの、一部業種で生産調整の動きがみられるなか、前月比では減少している。
- 先行きは、緩慢ながらも底堅い回復基調が続くと見込む。企業の生産計画は、国内の設備投資需要などに支えられ、11月：前月比+3.3%、12月：同+2.4%と、総じて強気である。機械受注の10-12月期見通しからも、はん用・業務用機械などの資本財で堅調が続く可能性が示唆されている（図表2）。
- 最大のリスクは、海外景気の悪化に伴う輸出への悪影響である。自動車生産の動向をみると、欧米の新車販売台数が底堅く推移するなか、現時点での下押し圧力は限定的だ。もっとも、欧米景気のさらなる悪化も想定されるため、先行きの生産を巡っては、①供給制約下で抱えた受注残による生産下支え効果や、②内需回復に伴う小型自動車の好調の持続性、に注目だ（図表3）。
- 加えて、電子部品・デバイス工業における生産調整の動きがいつまで続くのかも重要となる。出荷・在庫バランスをみると、液晶パネルについては減産圧力が一巡した様子が見え始めるものの、半導体関連財（線型回路・モス型回路）については、依然として減産圧力が強い状況だ（図表4）。今後は、23年半ばにかけて、内需の緩やかな回復を背景に改善に転じると見込まれるが、外需が減速するなかで、半導体関連財の増産ペースは緩やかに止まるだろう。